

発達障がいをもつ子どもの母親と祖父母の関係性： 母親の祖父母との日常的な関わりのとらえに関する 語りの考察

尾方, 里帆
九州大学大学院人間環境学府

遠矢, 浩一
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/1911192>

出版情報：九州大学総合臨床心理研究. 7, pp.5-16, 2016-01-20. 九州大学大学院人間環境学府附属総合臨床心理センター
バージョン：
権利関係：

発達障がいをもつ子どもの母親と祖父母の関係性

—母親の祖父母との日常的な関わりのとらえに関する語りの考察—

尾方里帆 九州大学大学院人間環境学府 / 遠矢浩一 九州大学大学院人間環境学研究院

要約

本研究は、発達への偏りがある子どもの母親が、祖父母と母親自身、祖父母と子どもの関係性をどのようにとらえているのか探索的に研究することを目的とする。これまでの研究からは、発達への偏りがある子どもの母親と祖父母の関係性に関しては、ネガティブな面が強調されがちであるが、祖父母の存在を肯定的にとらえている面もあることが明らかになっている。母親のとらえる祖父母との関わりについては、祖父母との日常的な関係性の影響が大きく、個人差も大きいと考えられた。本研究における母親の語りから、母親は、祖父母とのコミュニケーションについて①祖父母からのサポート、②子どもとの関わりのとらえ、③祖父母の思いのとらえ、④祖父母との関わり、の4つの視点からとらえていることが明らかになった。また、母親は祖父母がサポート源になっていると感じていることや、母親側から祖父母と積極的に関わりをもとうとしていることが示された。その一方で、祖父母との関わりに難しさを感じている母親や子どもの障がいを祖父母に理解してもらえないと感じる母親もいることが示唆された。

キーワード：発達障がい、母親、祖父母

問題と目的

多くの祖父母が孫との関係をもちながら生活したいと考えており、祖父母にとって孫の存在は精神的充足感につながると考えられている(山崎ら, 2004)。祖父母にとっての孫は、精神的健康の増進(中原, 2011)や心理的な支えとなる存在であり(田畑ら, 1996)、孫との関わりを楽しみにしていることが考えられる。孫にとっても、祖父母は特別な意味をもっていると考えられ、子ども時代に祖父母と情緒的な交流をもつことで、子どもの精神面の安定(田畑ら, 1996)や心理面における発達に肯定的な影響がある(關戸, 2001)ことが示されている。その一方で、祖父母と孫の関わりは、時間的にも内容的にも限定されたものになりがちであるということも指摘されており、物質的手段による交流が多く精神的な交流が少なくなっていたり(三宅・小林, 1993)、祖父母との交流が「一緒に遊ぶ」「テレビを見る」などの日常的な行動に限定されていたり(吉田・冷水,

1991)することが明らかにされている。このことには、18歳未満の子どもがいる世帯の80%が核家族世帯であり(総務省, 2010)、多くの子どもが祖父母と離れて暮らしていることが少なからず影響していることが考えられる。祖父母と孫の関係性は、互いに肯定的な影響を与えていると考えられるが、祖父母と孫が離れて暮らしていることも多く、関わりは限定されたものになりがちであることが推測される。ここで、両者の交流のきっかけを作ったり互いの関係の調整役を担う存在として、親世代の役割が大きなものとなると考えられる。

板野ら(1996)は、孫と祖父母の交流について、両親がキーパーソンとなって交流の機会を生かすことが重要であると述べている。板野らは、父方の祖父母とは気兼ねや遠慮が生じがちなのに対し、母方の祖父母とは気兼ねのない密着した関係にあることを指摘した。また、興津・浜(1997)は、父方祖母と母親の間では緊張関係が見られ嫁の立

場にある母親は強制力を感じる一方、母方祖母の場合は祖母の助言を受け入れないといった対応をとることもできると考えている。このように、母親にとって祖父母が原家族であるか否かによって関係性の保持における母親の配慮の仕方が異なることが推測される。

また、母親にとって祖父母は子育てのサポート役となると考えられている。田渕・中原(2006)によると、子育てに困ったときに助けとなる人が実父母や義父母であると感じている母親は、祖父母世代に比べて増えていることが明らかになった。祖父母世代は、近所の人から子育てに関するサポートを受けていたと感じている一方で、近年地域のつながりが希薄になっているといわれており、母親が子育てのサポートを同居、別居に関わらず家族に求めていることが指摘されている。つまり、祖父母世代の子育て参加へのニーズは、相対的に高まっていると見るのが妥当であろう。祖父母から母親へのサポート内容としては、物理的援助、経済的援助、育児への肯定感などが挙げられている(白石, 2012)。また、子育て中の母親にとって、祖父母は、生活面での実際の援助だけでなく精神的な支えとなると考えられ、八重樫ら(2003)は、子育て中の母親にとって祖父母は重要なインフォーマルな社会資源であるといえると述べている。インフォーマルな社会資源とは、祖父母による母親の子育てへの不安や負担についての相談相手、母親の精神面でのケア、子育てに対する情報源などである。その一方で、母親は頼りがいのある祖母に「育児関与を求める気持ち」とともに、「自分の育児をしたい」という葛藤をもつことも指摘されている(白石, 2012)。母親にとって、祖父母との関係性の保持への配慮や子育てをめぐる葛藤などにより、祖父母との関わりが負担となる側面もあるが、祖父母との関係は子どもにとっても母親にとっても重要なものであることが考えられる。

発達障がいをもつ子どもの母親にとっても、祖父母を含む家族は子育てにおけるサポート資源と

なりうることが考えられる。太田(2010)は、発達障がいをもつ子どもの母親にとって、家族からのソーシャルサポートは、育児を認めてもらえる、一緒にいると安心できるなど、感情的な支援が基本となっていることを示し、子どもの面倒を見るなどの手段的サポートも高く認識されていることが明らかになった。一方で、母親に対する家族からのサポートは個人差が大きいことも指摘し、家族からのソーシャルサポートを受けにくい状況にある母親も存在していることが指摘されている。岩崎・海蔵寺(2007)は、発達障がいのある子どもに関して、特に祖父母は身近で子どもの行動や親の対応を見る機会が多い一方で、障がいに対する知識が少ないことが多く、親の育て方に対して誤解や非難をしやすいと指摘した。高橋・増淵(2008)が、アスペルガー症候群等は、その障がいのもつ独特の困難が理解されにくく本人の抱える問題が「わがまま・自分勝手」などと誤解されやすいと述べているように、発達障がい特有の特性が一見して理解しにくいことも影響していると考えられる。今野(1998)も、障がいを持つ子どもの母親は、定型発達の子どもの母親に比べて父方祖母と母親自身および子どもとの関係についてネガティブな意識をもちやすいということを示唆している。太田ら(2013)は、発達障がいをもつ子どもの母親のストレスが強くなる要因として、祖父母などの「周囲からの協力が得られないこと」を示し、子どもの障がいを理解してもらえないために周囲の人から子どもや自身の子育てに対して否定的な言動を受けることも多いと指摘した。このような祖父母の言動は、母親の障がい受容にも影響があることが明らかになっている。中田(2002)は、発達障がいをもつ子どもの場合、定型発達の子どもの違いが分かりにくく、子どもの問題が障がいによるものだと分かっても他の家族が子どもの障がいを認めようとしないことを指摘している。その結果母親と他の家族の間に意識の違いが生じ、家族間に葛藤が生まれたり母親が障がいを否定す

る気持ちを強くさせたりすることにつながると述べている。その一方で、佐鹿（2007）は、母親が子どもの障がいと向き合っていくなかで身近な人の支えは大切であり、実母が支えとなった事例を挙げている。以上のことから、母親の障がい受容においても祖父母の影響が大きいことが推測される。

野尻（2012）は、祖父母の障がい受容を促す要因として、祖父母が診断名を知ることを挙げ、そのことが障がいについての情報収集につながり前向きな気持ちへの変換や周囲への告知意識が高まるきっかけになると述べている。しかし、今野（1997）は、障がいを持つ子どもの親が子どもの障がいについて祖父母に説明することは、心理的、時間的、知識的、経験的に困難な状況にあると述べている。遠矢・岩男（2013）も、母親は発達障がいをもつ子どもの行動特徴を祖父母に伝える際に何らかの難しさを感じることを示し、それは祖父母と会う頻度によって異なるものではないことを指摘している。母方祖父母に比べて父方祖父母に対する説明に困難を感じていることも示唆されており、祖父母と母親の日常的な関係性が影響していることが考えられる。神崎（2009）は、発達障がいをもつ子どもの母親へのインタビューで、祖父母の存在について前向きな意見が多いことを示した。また、ほとんどの母親が祖父母に子どもの障がいのことを伝えているが、伝えるか伝えないか、どこまで説明をするかということに関しては、それまでの母親と祖父母の関係や家族の実態

によって様々であると述べている。

以上のことより、本研究では、発達障がいをもつ子どもの母親がとらえる自身と祖父母、子どもと祖父母との関係性を明らかにする。祖父母と母親や子どもの日常的な関わり視点、子どもの特徴の祖父母への話しやすさおよび話しにくさ、成長にともなう祖父母との関係性の変化についての母親のとらえについて、母親自身の語りを分類し、支援の一助とすることを目的とする。

方法

1. 調査方法

(1) 調査時期

X年11月下旬～X年12月中旬

(2) 調査対象

Y大学の集団活動を通じた対人関係スキルの発達支援プログラムであるZグループに参加している子どもの母親5名（以下調査協力者）を対象にインタビューを実施した（Table 1）。

(3) 調査方法および手続き

事前にZグループのリーダーをしている臨床心理士の下承を得た後、グループ活動の前後の時間に筆者がインタビューへの協力を依頼した。その際、調査の主旨と注意点を説明して同意を得た。後日、調査協力者に対して1人30分程度の半構造化面接を行った。

インタビュー調査は、毎回のグループ活動の前後の時間を利用して行い、Y大学の面接室で行った。インタビューの内容は、調査協力者の下承を

Table 1. 調査協力者プロフィール

ID	調査協力者の子ども	子どもの診断名	祖父母		同居/別居
			父方	母方	
A	小5・男児	ADHD 構音障害	祖父・祖母	祖父・祖母	別居
			母方	祖父・祖母	別居
B	小5・男児	なし	祖父・祖母	祖父・祖母	別居
			母方	祖父・祖母	別居
C	中3・男児	なし	祖母		別居
			母方		
D	小6・男児	高機能自閉症	祖母	祖母	別居
			母方	祖母	別居
E	高2・男児	言語性LD アスペルガー障害	祖母	祖母	別居(入院中)
			母方	祖母	別居

得た上で、ICレコーダーを使用し録音を行った。加えて、筆者が補足的にメモをとりながら行った。

(4) 倫理的配慮

調査は、調査後にフォローアップが可能であり、Zグループのリーダーである臨床心理士に許可を得た母親に行った。また、調査を行うにあたり、調査協力者に対し、得られたデータは研究以外の目的では使用しないこと、使用にあたっては個人が特定されないように配慮することを書面と口頭で説明し、了承を得た。

2. 調査内容

(1) フェイスシート

インタビュー調査実施時、開始前に記入を求めた。内容は、母方祖父母および父方祖父母と同居／別居しているか、録音の可否についてであった。上記の内容をA4用紙1枚に示した。

(2) インタビュー内容

調査の内容を以下の①～③に示す。

①母親が感じる祖父母との関わり

- i) 祖父母の存在が子どもにとってよいと感じること
- ii) 祖父母の存在が母親にとってよいと感じること

②祖父母との子どもについての話

- i) 子どもの特徴や難しさについて祖父母と話す機会
- ii) 子どもの特徴や難しさについて話をするときの祖父母の反応
- iii) 話すときに苦勞すること
- iv) 話すときに気をつけていること
- v) 子どものことを話してみてもよかったこと

③子どもの成長にともなう関係性の変化

- i) 子どもと祖父母の関係性の変化
- ii) 母親と祖父母の関係性の変化

3. 分析方法

KJ法により分類・分析を行った。まず、インタビューによって得られた音声データについて、調査対象者一人ひとりの聞き取り可能な発言を書

き起こしたものをロウ・データとして作成した。次に、質問項目に対する回答と思われた部分をロウ・データから選出し、ラベルを作成した。その後、ラベルの意味や類似性でグループ化を行った。最後に、単純集計を行った。なお、分析は筆者と臨床心理士資格をもつ3名の計4名で行った。

結果と考察

1. 祖父母との関係についての母親の語りの分類

インタビューにおける母親の回答をもとに、KJ法による分類を行った。その結果、【祖父母からのサポート】、【子どもとの関わりのとらえ】、【祖父母の思いのとらえ】、【祖父母との関わり】の4つの大カテゴリーに分類された (Table 2)。

(1) 祖父母からのサポート

【祖父母からのサポート】には、『情緒的サポート (30.6%)』 (例：子どもを認めてくれる)、『情報的サポート (8.3%)』 (例：意見は言ってくれる)、『見守り (8.3%)』 (例：どうしなさい、こうしなさいとは言われなかった)、『祖父母の存在自体のありがたさ (25.0%)』 (例：関わってくれることに感謝している)、『現実的サポート (27.8%)』 (例：子どもの面倒を見てくれる) が含まれ、全回答の33.6%がここに含まれた。

実際的なサポートとして、『情緒的サポート』、『情報的サポート』、『現実的サポート』が挙げられる。特に、『情緒的サポート』と『現実的サポート』が高い割合を示した。太田 (2010) は、家族からのサポートに関して、『情緒的サポート』を中心とする感情的な支援や『現実的サポート』が発達障がいをもつ子どもの母親に高く認知されていることを示しており、本研究で得られた結果は、こうした先行研究とも一致した結果であると考えられる。『情報的サポート』は、他の実際的なサポートに比べると割合は低かった。太田 (2010) も、発達障がいをもつ子どもの母親は、『情報的サポート』に関して、他のサポートに比べて家族からのサポートを受けていると認識していないと述べて

Table 2. 祖父母との関係についての母親の語りの分類

大カテゴリー	%	小カテゴリー	%	回答 (件数)		
祖父母からのサポート (36)	33.6%	情緒的サポート (11)	30.6%	子どもを認めてくれる 子どもを受け入れてくれて助かった (2) アドバイスをくれるので話してよかった 子どもの成長と一緒に喜んでくれる 「何か大変ね」みたいな感じ 冷静に受けとめていると思う 「(母親が) しっかりしないと」という感じ (2) ある程度うんうんって聞いてくれる (2) 愚痴を聞いてもらう		
				情報的サポート (3)	8.3%	意見は言ってくれる (2) 「専門的なところに行ったほうがいい」と言っていた
				見守り (3)	8.3%	否定はされない どうしなさい、こうしなさいとは言われなかった ゆったりと子どもを見ることができると、障がいがあるって言っても、「そんなことないよ、大丈夫だよ」って、ずっと言い続けてくれた
				祖父母の存在自体の ありがたさ (9)	25.0%	味方が1人いるような感じで心強い おごづかいやプレゼントをもらえる貴重な存在 (2) 関わってくれることに感謝している いてくれることがありがたい 血縁関係を子どもに経験させてあげられる 祖父母には恵まれている 子どもにいたわりの気持ちを教えることができる 年上の人への尊敬の気持ちを教えることができる
				現実的サポート (10)	27.8%	子どもと遊んでくれる (2) ご飯の用意をしてくれる 子どもの面倒を見てくれる (4) 子どもが小さい頃お世話をしてくれた (2) 行事ごとと一緒に過ごす
子どもとの関わりのとらえ (14)	13.6%	母親と同様の関わり (2)	14.3%	子どもの特性によりであろうという対応してくれる 同じような関わりかたをしようとしてくれる		
		子どもの居心地のよさ (5)	35.7%	祖父母の家では子どもが好きなようにできる (2) 甘えられる 「しょうがないから本人の好きなようにすればいい」という感じ 行ったときは優しくしてくれるので、それでいいかなと思う		
		子どもへの注意 (3)	21.4%	注意されるのが嫌みたい (2) 怒られてからおじいちゃんの前ではお兄さん		
		子どもへの心配 (4)	28.6%	関わっているとどうしても心配する 小さい頃から心配している 心配している (2)		

大カテゴリー	%	小カテゴリー	%	回答 (件数)
祖父母の思いのとらえ (19)	17.8%	母親自身への心配 (1)	5.3%	私たちのことを心配している
		祖父母からの遠慮 (3)	15.8%	祖父母も遠慮していると思う 子育てについても言いたいことがありそう あまり深く聞いてはいけないと思うのか、あまり祖父母から聞いてくることはない
		祖父母のとまどい (1)	5.3%	発達障がいの子孫に対してどうつきあっていけばよいか分からない感じ
		障がい理解 (5)	26.3%	本や新聞を読んで、分かっているよう (2) 障がいのことは理解してくれている 分かってくれるようになって、つきあいやすくなった 1番分かってくれている
		無理解 (9)	47.4%	Zグループに来ていることを快く思っていない 愛情不足でかたづけられる 障がいがあると受けとめていない (2) 大変さを分かってもらえない (2) 「私から見れば何でもないわ」という感じ 分かっているようにしているけど実際理解はしていない 自分の価値観と逸脱していることを受け入れようとしない
祖父母との関わり (36)	33.6%	積極的関与 (21)	58.3%	話をする (5) ありのままを話している (2) ボンと言える (2) 言いたいことを言う いいことも悪いことも話す 話すときに難しいことはない 何でも話すようにしている (2) 近所の人の話と一緒に思われたら困るので、ちょっとしたことでも自分の気持ちを話すようにしている あったことをちゃんと話すのが1番 心配させるために話すのではいけない、と心がけている 孫だから知ってもらわないと 良き理解者になってもらえるよう話すようにしている 結果だけじゃなくて、そこにいたるまでの過程を言うように心がけている 話すようになってから、信頼関係が回復した
		消極的関与 (10)	27.8%	深く話すことはない (5) 詳しく伝えなくてもいいかなと思う 子どもが何かしたときに特徴や接しかたを話すことはある 学校をどこにする、という話はする 障がいについての話はした Zグループに来ていることは伝えている
		関与の難しさ (2)	5.6%	ほとんどというか、関わっていないです。 私もよく分からないので、何と伝えればいいのか分からなかった
		祖父母への遠慮 (3)	8.3%	主人の両親には遠慮する 言いにくかったし、何と言っているかわからなかった 主人がお父さんがけんかするので気を使う
		分類不可能 (2)	1.9%	成長したから、最近はおばあちゃんに言っちゃいけないことと、言っていることの区別がつくようになった 中学生の娘がいるんですけど、そっちはかわいがる。Aに関しては、平等ではない感じがするので、Aも全然なついていない

おり、本研究の結果もこれと一致していると考えられる。また、本研究において発達障がいをもつ人と関わったことがある祖父から「専門的などころに行ったほうがいい」と言われたことや、新聞や本を読んで障がいのことを勉強してくれている祖父母が「意見は言ってくれる」ことが語られた。つまり、発達障がいを持つ人との関わりの経験や発達障がいに関する知識をもった祖父母が、母親にとって『情動的サポート』源であるにとらえられていることが推測される。

具体的なサポートではないものでは、『見守り』や『祖父母の存在自体のありがたさ』が語られた。白石ら（2012）は、母親が、子育てのサポートをしてくれる祖父母に対してありがたさを感じる一方で、「自分の育児をしたい」という葛藤をもつことを指摘しており、母親に育児を任せて見守ることが必要となる場合も考えられる。また、祖父母は、発達障がいをもつ子どもに関して、親の育て方に対して誤解や非難をしやすいと指摘されており（岩崎・海蔵寺，2007），その点から、具体的なサポートがなくとも否定されないことが母親に肯定的にとらえられることが考えられる。

子どもにとって祖父母は、祖父母がいるだけで安心できたり、困ったときの拠り所になることや、親子関係の調整の役割を担う機能が示されており、存在自体に価値を感じていることが指摘されている（田畑ら，1996）。母親も「いてくれることがありがたい」と語っているように、『祖父母の存在自体のありがたさ』を感じており、母親にとっても祖父母が同じような機能を担っていることが考えられる。また、「血縁関係を子どもに経験させてあげられる」や「子どもにいたわりの気持ちを教えることができる」というように、祖父母に特有の役割を母親が感じていることが推測される。

(2) 子どもとの関わりのとらえ

【子どもとの関わりのとらえ】には、『母親と同様の関わり（14.3%）』（例：子どもの特性によいであろうという対応をしてくれる）、『子どもの居

心地のよさ（35.7%）』（例：祖父母の家では子どもが好きなようにできる）、『子どもへの注意（21.4%）』（例：注意されるのが嫌みたい）、『子どもへの心配（28.6%）』（例：関わっているとどうしても心配する）が含まれ、全回答の13.6%がここに含まれた。

祖父母と関わる子どもを見て、母親は『子どもの居心地のよさ』を感じることもあることが示された。「祖父母の家では子どもが好きなようにできる」と語られたように、祖父母の家が自由でできる居心地のよい場所となっているにとらえている。発達障がいをもつ子どもは、友達関係が緊密になってくる小学校中学年ごろから孤独感や孤立感が強まり、周囲とのズレがいじめの対象となってしまうことが指摘されており（高橋・増渕，2008），学校での居場所のなさを感じる事が少なくない。それだけに、子どもが居心地のよさを感じている様子を見ることで、母親の安心感につながりうると考えられる。また、母親は子どもと関わる祖父母を見て、祖父母が『母親と同様の関わり』をしてきているにとらえることがあることも明らかになった。今野（1998）は、障がいをもつ子どもの母親の3割ほどが「祖母の子どもへの接し方に大きな不満がある」と感じており、定型発達の子どもの母親を大きく上回っていると述べている。さらに、それが子どもに障がいがあることとの関連を否定できないものがあることを示唆した。したがって、「子どもの特性によいであろうという対応をしてくれる」というような『母親と同様の関わり』は、母親にとって肯定的なとらえとなることが推測される。以上より、母親が、子どもと祖父母の関わりのなかに『子どもの居心地のよさ』や『母親と同様の関わり』を見ることで、間接的に母親に肯定的な効果をもたらすことが考えられる。

『子どもへの注意』は、祖父母がしつげとして行っていると考えられる。八重樫ら（2003）は、子どもが祖父母の「言うことを聞く」ことに「大

体あてはまる」ととらえている母親は、「よくあてはまる」、「全くあてはまらない」ととらえている母親よりも子育て不安が低いと述べている。祖父母が子どものしつけに過剰に関与したり全く関与しなかったりすると、母親は否定的にとらえがちになることが推測されるが、祖父母が適度にしつけに関与することは、母親の子育て不安を少なくすると考えられる。本研究では、子どもが「注意されるのが嫌みたい」、「怒られてからおじいちゃんの前ではおりこうさん」と語られたが、母親が祖父母の『子どもへの注意』に対して必ずしも否定的にとらえていないことも考えられる。

『子どもへの心配』について、今野（1998）は、祖父母が子どもの将来を心配している、子どもがかわいそうと思っているととらえる母親は、子どもが障がいをもつ母親で極端に高いと指摘している。これには、祖父母が障がいについての現状を知らないことや、障がいをもつ子どもの可能性についての誤解や偏見を解けないでいることが挙げられると述べている。一方で、「関わっているとどうしても心配する」という語りが見られたように、『子どもへの心配』は、祖父母との関わりがあることで生じるものでもあると推測され、母親にとっては、子どものことを気にかけてもらえているという感覚になることも考えられた。

(3) 祖父母の思いのとらえ

【祖父母の思いのとらえ】には、『母親自身への心配 (5.3%)』（例：私たちのことを心配している）、『祖父母からの遠慮 (15.8%)』（例：祖父母も遠慮していると思う）、『祖父母のとまどい (5.3%)』（例：発達障がいの孫に対してどうつきあっていけばよいか分からない感じ）、『障がい理解 (26.3%)』（例：障がいのことは理解してくれている）、『無理解 (47.4%)』（例：Zグループに来ていることを快く思っていない）が含まれ、全回答の17.8%がここに含まれた。

「私たちのことを心配している」と語られたように、母親が、祖父母は発達障がいをもつ子ども

とともに、その子どもを育てる『母親自身への心配』をとらえている。今野（1997）は、祖父母が子どもの障がいを知らされて、障がいをもつ子どもの親となった自分の子どもに対しても悲しみや無力感を抱くことを指摘し、二重の心痛があることを明らかにしている。また『子どもへの心配』と同様に、母親は自分のことを気にかけてもらえていると感じることも考えられる。

母親が、特に父方祖父母に対して遠慮や気兼ねが生じがちになることは多くの研究で明らかにされている（板野ら、1996；興津・浜、1997）。本研究では、同時に『祖父母からの遠慮』も感じていることが示され、母親は互いに遠慮があると感じていることが推測される。

発達障がいをもつ孫への『祖父母のとまどい』も語られた。松下（2003）が、軽度発達障がい児の母親は、障がい受容過程において、ポジティブな感情とネガティブな感情の両面的感情を経験すると指摘しているが、野尻（2012）は、祖父母の障がい受容も、段階的に進むものではなく、松下（2003）が述べたような過程をたどることを推測している。母親の障がい受容の過程では、診断時や日常的に繰り返される感情として、とまどいを感じている母親がいることが報告されており、祖父母にも同様の思いがあることが考えられる。それに加えて、自身の経験と異なる子どもの様子を見てとまどいを感じる祖父母も少なくないと考えられる。

祖父母の『障がい理解』が語られた一方で、『無理解』が【祖父母の思いのとらえ】の半数近くを占めた。「本や新聞を読んで、分かっているよう」のように、祖父母が理解への努力をしてくれる姿を見ることなどで『障がい理解』をとらえることが考えられる。また、「分かってくれるようになって、つきあいやすくなった」と語られたように、祖父母の『障がい理解』が母親と祖父母の関係性に影響している可能性も考えられる。その一方で、「愛情不足でかたづけられる」、「大変さを分かっ

てもらえない」と語られたように、祖父母の障がいについての誤解や、母親自身との感覚のずれが大きいととらえることで、母親は障がいに対する『無理解』を感じることもあると考えられる。

(4) 祖父母との関わり

【祖父母との関わり】には、『積極的関与(58.3%)』(例:言いたいことを言う),『消極的関与(27.8%)』(例:深く話すことはない),『関与の難しさ(5.6%)』(例:ほとんど関わっていないです),『祖父母への遠慮(8.3%)』(例:主人の両親には遠慮する)が含まれ、全回答の33.6%がここに含まれた。

【祖父母との関わり】においては、『積極的関与』が高い割合を示した。これには、「言いたいことを言う」や「ありのままを話している」のような祖父母に対する話しやすさと、「孫だから知ってもらわない」というように、母親から子どものことを伝える目的をもって意識して話すことが含まれている。前者は、祖父母が「ある程度うんうんって聴いてくれる」と語られたように、母親への『情緒的サポート』とも関連があると考えられる。後者は、母親が目的をもって祖父母に話すことで祖父母の『障がい理解』につながりうると推測される。また、「話すようになってから信頼関係が回復した」と語る母親もいたように、祖父母との関係性の変化につながることもある。このように、母親は、子どもと祖父母の関係も考えながら祖父母との関わりを持っていこうとしていることが推測される。

その一方で、『消極的関与』や『関与の難しさ』も語られた。深く話すことはせずに部分的に伝えたり、関わりをもつことが少ないととらえている母親もいる。祖父母との交流に関して、もともと関わりの少ない祖父母とは、『祖父母への遠慮』も相まって『消極的関与』や『関与の難しさ』が大きくなっていくことが考えられる。また、『積極的関与』を行っていたが、祖父母の『無理解』から、祖父母に対して母親にあきらめや不信感が生じて『消極的関与』へ変化することも考えられ

る。また、中田(2002)は、母親自身が子どもの障がいを理解していてもそれをすぐには周囲に公表することができず、発達障がいのように見えにくい障がいの場合はそれが顕著であると述べている。『消極的関与』の背景には、このような母親の迷いがあることも推測される。

2. まとめ

本研究では、発達障がいをもつ子どもの母親が、祖父母との関係について、祖父母からのサポートに関する事、子どもと祖父母の関わりに関する事、祖父母の思いに関する事、自身と祖父母の関わりに関する事をとらえていることが明らかになった。

まず、祖父母は、母親にとって子育てに関するサポート源となりうることが明らかになった。母親は、祖父母から情緒的サポートや現実的サポートのような実際的なサポートを受けているととらえていることが示された。それだけでなく、祖父母が母親の子育てを見守ることや祖父母の存在自体の価値も母親にとってサポートとしてとらえられていることが推測された。さらに、子どもが居心地のよさを感じていることや、祖父母が母親の気をつけている関わり方を実践してくれていることのように、子どもと祖父母の関わりの様子を見ることで母親に肯定的なとらえをもたらしうることが示唆された。このように、祖父母の存在が母親にとって肯定的にとらえられる側面があると考えられる。

また、母親は積極的に祖父母と関わりをもとうとしていることが明らかになった。母親の積極的な関わり背景には、祖父母とのつきあいやすさがあることとともに子どもと祖父母の関係性を考慮した母親の努力が大きい場面も存在することが示唆された。しかし、祖父母が子どもの障がいを理解していないととらえる場面がある母親も少なくなかった。つまり、発達障がいを持つ子どもの母親は、祖父母との関係性の保持に関する配慮や努力を行っているが、それが祖父母の障がい理解

につながりにくいと感じている可能性が考えられる。

引用文献

- ・板野美佐子・花谷香津世・奥山清子 (1996). 母親が見た幼児と祖父母の交流 川崎医療福祉学会誌, 6-1, 63-71
- ・岩崎久志・海蔵寺陽子 (2007). 軽度発達障害児をもつ親への支援 流通科学大学論集—人間・社会・自然編一, 20 (1), 61-73
- ・神崎 愛 (2009). 発達障害児をもつ母親の障害に対する考え方への祖父母の影響に関する研究 兵庫教育大学大学院学校教育研究科平成21年度修士論文
- ・今野和夫 (1997). 障害児の祖父母 障害者問題研究, 25 (1), 77-85
- ・今野和夫 (1998). 障害児の祖父母についての研究 一同居の父方祖母に対する母親の意識を中心に— 秋田大学教育学部紀要 教育科学部門, 53, 45-53
- ・松下真由美 (2003). 軽度発達障害児を持つ母親の障害受容過程についての研究 応用社会学研究, (13), 27-52
- ・三宅美与子・小林京子 (1993). 高齢化社会に対応した教材開発 (第1報) —祖父母に対する生徒の意識の実態— 広島大学付属福山中・高等学校 中等教育研究紀要, 33, 43-61
- ・中原 純 (2011). 前期高齢者の祖父母役割と主観的 well-being の関係 心理学研究, 82 (2), 158-166
- ・中田洋二郎 (2002). 子どもの障害をどう受容するか 大月書店
- ・野尻恵美子 (2012). 障害児をもつ祖父母の障害受容を促す要因の検討 コミュニケーション障害学, 29, 1-8
- ・興津真理子・浜 治世 (1997). 母親による子どもの賞罰に及ぼす父方祖母・母方祖母の影響 心理学研究, 68 (4), 281-289
- ・太田顕子 (2010). 発達障害のある幼児児童を育てる母親のソーシャルサポートに対する認識 幼年児童教育研究, 22, 35-44
- ・太田絵理・富澤弥生・鈴木千明 (2013). 軽度発達障害をもつこどもの母親の子育てに関するストレスとその影響要因 北日本看護学会学術集会プログラム・抄録集, 16, 93-93
- ・佐鹿孝子 (2007). 親が障害のあるわが子を受容していく過程での支援 (第4報): ライフサイクルを通じた支援の指針 小児保健研究, 66 (6), 779-788
- ・關戸啓子 (2001). 祖父母との人間関係が大学生の自己受容と対人態度に及ぼす影響 川崎医療福祉学会誌, 11-1, 49-55
- ・白石京子 (2012). 祖母の育児関与に及ぼす母娘関係の心理的影響 —祖母の育児関与に対する母親 (娘) と祖母の意識尺度作成のとりくみ— 人間関係学研究, 18 (2), 29-39
- ・総務省統計局 (2010). 平成22年国勢調査 <<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/index.htm>>
- ・田畑 治・星野和実・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本 剛・遠藤英俊 (1996). 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成 心理学研究, 67 (5), 375-381
- ・田淵恵・中原純 (2006). 祖父母世代による子育て参加の可能性の検討 生老病死の行動科学, 11, 53-62
- ・高橋 智・増渕美穂 (2008). アスペルガー症候群・高機能自閉症における「感覚過敏・鈍麻」の実態と支援に関する研究 東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 59, 287-310
- ・遠矢浩一・岩男美美 (2013). 発達障害児の母親が捉える祖父母との関係性 —発達障害特有の行動特徴について話すときの難しさの視点から— 日本発達障害学会第48回研究大会発表論文集, 149
- ・八重樫牧子・江草安彦・李 永喜・小河孝則・

- 渡邊貴子 (2003). 祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響 川崎医療福祉学会誌, 13 (2), 233-245
- ・山崎美佐子・角間陽子・草野篤子 (2004). 異世代間におけるネットワークの可能性 信州大学教育学部紀要, 112, 99-110
- ・吉田純子・冷水 豊 (1991). 児童と老人との交流 社会老年学, 34, 3-12

謝辞

今回の調査にご理解とご協力をいただきました保護者の皆さまに心より感謝を申し上げます。

**Relationship with grandparents and mothers of children with developmental difficulties
— A study of considers daily relationship with mothers and grandparents —**

Satoho OGATA

Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

Koichi TOYA

Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

The purpose of this study was to investigate how mothers of children with developmental difficulties think about relationship between grandparents and children or mothers. In previous researches, it was clear that mothers feel negative about relationship with grandparents, but also that grandparents have some important role to support their daughter(mothers). The relationship between mothers and grandparents in daily life have much influence on their interactive communication about child's development however, these influence differ substantially between individuals. The results indicate that mothers conceive their quality and quantity of communication with grandparents from the viewpoint of 1) support from grandparents 2) relationship between grandparents and children 3) consideration about grandparent's feeling and thoughts 4) getting involved with grandparents. However, some mothers felt difficulties about getting involved with grandparents, or about letting grandparents understand their children's developmental weakness.

Keywords: developmental difficulty, mother, grandparents